

検証・浦和電車区事件の真実 No. 8

民主化闘争情報 号外] 2008 年 4 月 21 日 発行 日本鉄道労働組合連合会 (JR連合)

第8回 ついに職場での吊し上げが始まる

Y氏(当該事件被害者)は、前号の通り、2001年1月19日にキャンプの「作り話」を分会に打ち明け、徹底的に糾弾、追及された。それでも、山田被告の命令に従い、この間の経過を記載した文書を2通作成したほか、上原分会長(被告)の許しを請うため、手書きの手紙も書いた。精神的にも肉体的にも疲れ切っていたが、とにかく、JR東労組に何とか許してもらおうと必死だった。

ところで、1月19日はJR東労組浦和電車区分会の「旗開き」であった。この場では上原分会長に続き、分会の上部機関である大宮地方本部、浦和支部の来賓も異口同音に「Y氏の組織破壊攻撃は許さない！」などと非常に厳しい口調で発言した。同じく来賓で参加していた浦和電車区のI区長もその発言を聞いていた。この頃にはすでに、JR東労組の地方本部の段階でも、Y氏のことが「組織破壊攻撃」として大問題にされていたことがよくわかる。

ついに職場のイジメが現実には！

すでに何度も吊し上げを受けて疲れ果てていたY氏は、キャンプの経過についての「作り話」が発覚した今日、今まで以上に激しく罵倒、追及されるのではないかと不安でたまらなかった。いつ何時脅しを受けるかも知れないと思い、勤務時間中の電車運転の折返し時にホームなどで待機する場合も、定められた休憩室には入らず、駅の周りで時間を潰し、時間を見計らって駅に戻るなど、JR東労組組合員との接触を避けようと努力していた。

しかし、1月21日、ついに勤務時間中のイジメが現実のものとなってしまった。Y氏が電車運転の乗り継ぎのため蒲田駅ホームを移動していたところ、黒被告に呼び止められ、「おまえ組合を辞めろ。嘘ついているんじゃない。責任をとって組合を辞めろってことは会社も辞めろってことだ。分かってるな、この野郎！」などと脅された。Y氏の不安は的中した。これは、吊し上げのほんの始まりだった。

「会社も辞めろ！」と吊し上げ

その日の夕刻、勤務を終え、浦和電車区ロッカー室に向かう途中の通路で、今度は、大淵被告と八ツ田被告が退勤を待ち構えていたかのように、後ろから付いてきて、突然、Y氏を呼び止めた。八ツ田被告は、「おまえ、ふざけたことしてくれたな」と切り出し、続いて大淵被告が、目の前にあった椅子を指さしながら、「そこへ座れ！」と命じた。Y氏が仕方なく腰を下ろすと、二人は威圧するようにY氏を睨みつけて立ち上がった。

大淵被告は、「おまえは組合を裏切ったんだぞ。組合を辞めろ。組合を辞めろってことは会社も辞めろってことだぞ。会社も辞めろ！」と大声で恫喝し、ヤクザさながらの吊し上げが始まった。Y氏は、これからどうなることかと恐怖に怯えていた。(次号に続く)